

特別支援学校における養護教諭が発信する チーム支援について

— PDCAサイクルを活用した健康課題への支援を通して —

笠原 奈々¹

特別支援学校の養護教諭は、専門性を持つ様々な職種と協働し、児童・生徒一人ひとりのニーズに応じた健康課題の改善に向けて支援をしている。支援を確実に成果につなげるためには、取組を形骸化させないことが重要であり、その意識をチームの中で高め、取り組む必要がある。本研究では、養護教諭の発信やPDCAサイクルを意識した取組が、健康課題の改善に向けたチーム支援において有効であることを検証した。

はじめに

特別支援学校に通う児童・生徒の数は増加し、障害・疾病も多様化している。その程度が、軽度から最重度まで様々である中、子どもたちが抱える幅広い健康課題に対応するため、養護教諭には、障害・疾病についての専門的知識が求められる。また、年齢に応じた発達・発育と、個の障害・疾病の状態に応じた発達・発育という二つの大きな視点から、児童・生徒の健康課題を捉えていくことが必要となる。養護教諭は、いち早く児童・生徒の健康課題に気付き、発信できるという職務の特質を生かしながら、学校保健に関してリーダーシップを取っている。現代的な健康課題（生活習慣の乱れ、いじめ、不登校、虐待等）への対応も含め、特別支援学校においても、養護教諭が日々の職務で得る情報や気付きが、健康課題の改善に向けた大きな手掛かりとなることは言うまでもない。

しかし、自分の状態を表現することが苦手な子どもや、コミュニケーションスキルが低い子どもの場合、その困りに気付きにくい。また、身体健康課題が心に影響を及ぼしたり、逆に心の健康課題が身体症状として現れたりすることがあるなど、原因を探るのに時間がかかることもある。家庭的背景が、健康課題を複雑化させてしまうこともある。以上のことから、子どもの健康課題を捉えるには、多角的な実態把握が必要であるが、複数配置とはいえ、養護教諭だけで全ての情報を直接確認することは難しい。

中央教育審議会答申（平成20年）では、多様な健康課題への組織的対応として、養護教諭を中心に、関係教職員が健康相談や保健指導、健康観察等に積極的に参画することが提言されている。特別支援学校では、養護教諭やクラス担任が複数であり、多角的に児童・

生徒を支えている。また本県では、平成20年度より自立活動教諭（専門職）として、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士（以下、PT、OT、ST）、心理職を配置しており、それぞれの専門性を生かすことで、より児童・生徒の個のニーズに応じたチーム支援を行っている。そのニーズが健康課題の改善であれば、養護教諭が、チームの中で教職員の連携をコーディネートしていく必要がある。そして、心身面から健康課題に気付くことができるという専門性を軸に、教職員や児童・生徒、家庭へアプローチしていくことが求められる。

研究の目的

教職員は、児童・生徒の健康面について、普段から情報を伝え合ったり、個別に相談したりすることが多い。それは児童・生徒の健康・安全に高い関心があるからである。一方で、「支援」という言葉の受け取り方には差があり、チーム支援の形を築くことが難しいケースもある。

児童・生徒が抱える課題は健康面だけではない。改善が必要な様々な課題に優先順位をつけざるを得ないこともある。特別支援学校に通う児童・生徒の「困り」の気付きにくさや、行動や学習の定着の難しさがあるといった実態から、健康課題の改善には継続した支援と時間が必要であることは明らかである。

また、障害が軽度であり、表面的には問題がないように見えていても、自分の「困り」を表現することが難しいため課題が表面化せず、支援されずに時間が過ぎてしまう児童・生徒もいる。適切なタイミングで支援をするためにも、課題の早期発見と、より丁寧な実態把握、効果的なチーム支援を目指す必要がある。

そこで本研究では、養護教諭が児童・生徒の健康課題を発信し、その改善に向けて、教職員がどのように連携し、支援したかという実践から、より良いチーム支援のあり方を探ることとした。

1 神奈川県立中原養護学校
研究分野（一人ひとりのニーズに応じた教育研究 支援教育）

研究の内容

1 研究の方法

(1) 実践前の調査

各校におけるチーム支援や、健康課題の改善に向けた支援の実態、課題と思われることなどを聞き取った。

調査期間	実施内容	対象者
7月24日	グループインタビュー (座談会形式)	県立学校保健会特別支援学校部会の養護教諭13名 * 知的障害教育部門単独校が3校、知的障害教育部門と肢体不自由教育部門の併置校が2校。各校に分教室(本県独自の形態)がある。
7月～9月	聞き取り	所属校の教職員

(2) P D C A サイクルを意識した実践

ア 実践対象

県内のA特別支援学校の知的障害教育部門高等部生徒を対象とした。養護教諭が、日頃の気付きを基に、支援が必要と思われる3事例を選定し、実践を行った。

イ 実践期間

平成27年9月から11月

ウ 実践内容

3事例について、Plan-Do-Check-Actionを意識しながら、健康課題の改善に取り組んだ。また、記録ツールとして、養護教諭が、児童・生徒の健康課題の気付きを確認するための健康課題気付きシートと個々の健康課題改善シートを独自に作成し、活用した。

(3) 実践後の調査

健康課題の改善の様子や教職員の意識の変容について振り返る中で、養護教諭の関与や、ケース会議の活用、使用した健康課題改善シートの有効性について意見を収集した。

調査期間	実施内容	対象者
11月下旬	聞き取り	実践に関わった教職員

2 研究の実際

(1) 実践前の調査から分かったこと

ア ケース会議

先行研究では、小学校、中学校において養護教諭の情報や気付きを基に実施したケース会議が、児童・生徒への理解を深め、個に応じた支援を検討できる場になっていることが述べられている。さらに、教職員が共通した認識の基で児童・生徒に関われたことがまとめられていた(福本2008)(城所2014)。実践前の調査でも、情報共有や取組の検討のため、ケース会議は開かれており、養護教諭は健康面や医療面、保健室での児童・生徒の様子を情報提供していることが確認できた。また、ケース会議は教職員の意見を一度に確認できる場として認識されており、必要に応じて、継続したケース会議も開かれていた。このことから、特別支

援学校においても、ケース会議は情報共有の場として機能していると言える。

一方、担任が児童・生徒や家庭の困りを教育的ニーズとして捉え、担任の依頼でケース会議が開催されることは多かったが、養護教諭や専門職が積極的にケース会議開催を発信することは、あまりされていなかった。また、1回目のケース会議で、健康面・医療面は支援の一部として共有されるが、2回目以降のケース会議で健康面以外が議題となる場合は、養護教諭に声が掛かりにくいことがあるという実態も挙げられた。養護教諭からは、「医療面や健康面は変化するものであり、児童・生徒の変化を随時把握していなければ、持っている情報を生かすことができない」という意見もあった。このことから、養護教諭は、自身が継続してケース会議に参加することに大きな意義があると考えていることが分かる。

イ 教職員の連携

これまで専門職と連携してきた事例が複数挙げられた一方、取組の結果や経緯を共有する機会を持ちにくいという実態も語られた。その理由として、教職員の多忙さや、個々の教職員の考え方が影響していることが意見としてあった。養護教諭は、教職員の多様な考えをまとめながら支援する難しさを感じていたが、専門職や外部の支援者が関わるメリットも経験的に感じていた。そして、様々な職種が関わるのが、担任や児童・生徒、家庭の意識の高まりにつながると肯定的に捉えていた。例えば、担任が話題にしないことの中にも、養護教諭や専門職にとっては重要な情報がある。併せて、保健室での児童・生徒の様子が、担任にとって重要な情報になりえることも指摘された。このことから、日頃、積極的に情報を提供したり共有したりすることは、教職員の多様な考えをまとめることになり、養護教諭や専門職がより良い関わりをするためには必要であることが分かる。

ウ 健康課題の改善

教職員は、日常的に健康課題について、情報共有や取組の検討をしていることが確認できた。それに基づいて保護者とも連携し、家庭での取組を具体的に提案している学校もあった。ある教職員からは、卒業後を見据え、学校にいる間に基本的な生活習慣を身に付けることや、様々な場面で関連した指導を行うことは大切であるということが語られた。しかし、専門性や考え方により、見立てを共有することの難しさや、教職員の多忙、児童・生徒や家庭の健康課題に対する意識の低さが課題として挙げられた。

養護教諭からは、取組がパターン化することで教職員の問題意識が低下し、継続指導を難しくしている実態が指摘された。取組を形骸化させずに継続させるためには、問題意識を教職員間で持ち続けることや、実際に対応する担任が、取組の重要性を実感できるよう、

養護教諭が働きかける必要性についても挙げられた。

(2) 仮説

実践前の調査で分かった支援の実態から、教職員がより良いチーム支援を展開していくためには、①教職員間での健康課題や支援方針の共有、②取り組みやすい具体策の検討、③定期的な取組の評価と提案が、大切であると考えた。さらに支援に継続性を持たせるための仮説として、以下の二つを設定した。

仮説1

養護教諭が、健康課題について積極的に発信し、関与していくことが、継続性のあるチーム支援につながる

仮説2

校内での情報共有の工夫し、記録を残すことが、継続性のあるチーム支援につながる
 これまでも健康面において児童・生徒に関わってきた養護教諭が、専門性をより発揮するためのアプローチや、情報共有の在り方について、①～③の視点を取り入れた実践を行い、仮説を検証することとした。

(3) 実践の流れ

ア P D C A サイクルを意識した実践

養護教諭が提案したことは、担任間で話し合い、必要に応じて取り組まれている。しかし、話し合った (Plan) 後の取組 (Do) の経緯や結果を共有する機会を持たないことも多く、取組の経緯や結果が、養護教諭に伝わってこないことがある。発信しても、評価 (Check) や改善 (Action) の機会がなければ、状況が変化せず、取組を形骸化させてしまうこともある。適切な評価を基に、改善あるいは次の取組の移行までをチームで実行することができればより効果が期待できる。そこで P D C A サイクルを意識し、評価 (Check) と改善 (Action) をチームで丁寧に行いたいと考えた。第1図に実践の流れを示す。養護教諭の関与を明確にしながら、健康課題の改善に取り組むこととした。

イ 養護教諭の関与

独自の健康課題気付きシートを使用して、ケース会議の前に養護教諭間で児童・生徒の見立てを共有した。健康課題の気付きの根拠、支援の方向性などを記入する欄を設け、ケース会議の効率化を図った。実践中、担任や生徒との会話の中で、取組のことを話題にしたり、励ましの言葉かけをしたりするようにした。

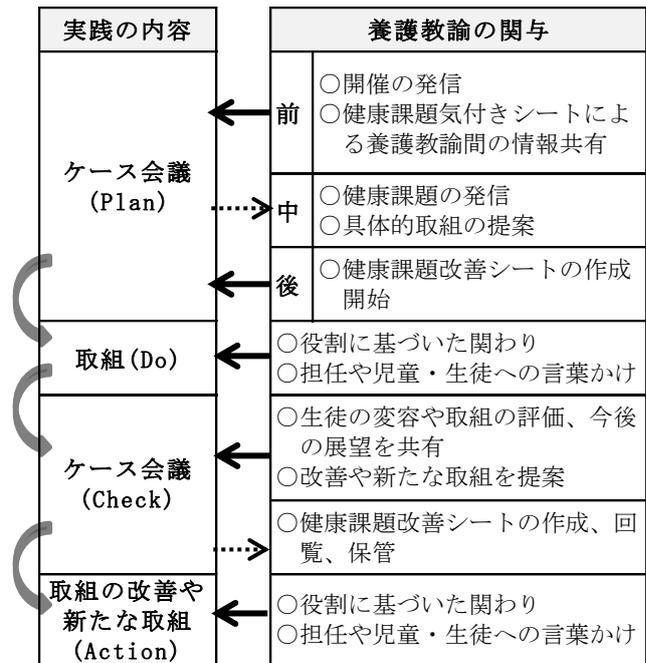
ウ ケース会議の開催

複数の教職員が参加し、2回のケース会議を開催した。参加者の負担にならないよう、短時間での実施を意識した。そのため、コーディネーター役の養護教諭は、話し合いのポイントを絞り、すぐに取り組めることを提案するよう心掛けた。

エ 健康課題改善シートの作成と回覧

記録ツールとして Plan-Do-Check-Action のカテゴリに分けた独自の健康課題改善シートを作成した。シ

ートには実態や具体的取組の内容、生徒の変容や次の取組について記入する欄を設け、筆者が個々の取組について共有したことを記入した。実践後は、関わった教職員や、学部長に回覧した後、保健室の個別ファイルに保管した。健康課題改善後の目指す姿や、取組に当たり不安に思うことが記入できるようにし、実際に取り組んだことだけでなく、健康課題の発信に至った背景や、生徒の気持ちも共有できるようにした。また、どのタイミングで何を行ったのかが分かる書式としたことで、取組が明確になることをねらった。



第1図 実践の流れ

(4) 実践事例

ア 事例1 PT・OTとの連携

(ア) 事例の概要

この事例で取り上げた生徒は、足首等に拘縮があり、転倒によるケガで保健室に来ることがあった。家庭での様子や主治医の指示等の情報が少なく、状態を改善しようとする意識が本人にもまだ定着していない。これまで養護教諭や専門職が参加するケース会議は行われておらず、養護教諭は日頃の様子から配慮の必要性を感じていた。また、養護教諭が担任と話す中で、専門職とも共有した方が良いと思われる情報があった。今後の生徒の自立を考える上でも、専門職や担任との連携が必要であると考え、養護教諭の提案でケース会議を開催した。

(イ) 実践の経緯

1回目のケース会議には、担任2名、教育相談コーディネーター (以下CO)、PT、養護教諭が参加した。担任の話から、クラスでどのような指導や配慮が行われているかを、養護教諭や専門職は知ることができた。また、担任は、生徒が普段から人目を気にする様子があり、個別指導を拒否するだろうと見立て、生

徒の気持ちに配慮したい思いがあった。そこで今年度は、生徒の日常生活や学習場面、行事での様子を教職員間で共有し、次年度の活動に向けて実態を引き継ぐことを目標とした。養護教諭やPT、OTは、宿泊学習において、様々な活動場面での情報収集を担当に依頼した。

2回目のケース会議には、担任1名、OT、養護教諭2名が参加した。1回目のケース会議後に主治医からの指示があり、学校のPTが医療機関のPTと連携できるようになっていた。さらに、保健室で個別のストレッチを継続して行った結果、拘縮も緩和し、生徒も喜んでいたという。そのような保健室での生徒の様子や効果を養護教諭が伝え、担任からは宿泊学習中の生徒の様子について報告があった。ストレッチを通した生徒の様子やその効果、家庭の取組等も共有することができた。良い状態を保持する目的で、冬休み中の家庭でのストレッチを養護教諭が提案したところ、担任も同じ意見であり、担任、養護教諭、PT、OTの具体的な役割分担まで行うことができた。

(ウ) 実践の成果

養護教諭は以上の実践を通して、生徒の健康課題の改善だけでなく、担任や生徒との関係性に良い影響があったと指摘した。専門職は、本人の個別指導ができたことを評価し、養護教諭の発信が校内の多職種連携のきっかけになったと指摘している。担任も適切な指導につながったことを評価した。

この事例が家庭での取組にまで進んだのは、個別指導が生徒の心身面に与えた良い影響を、担任・養護教諭・専門職それぞれで共有できたことが大きな理由であったと思われる。役割分担を行い、担任だけに負担がかからなかったことも理由の一つとして考えられる。また、2回目のケース会議に参加できなかったPTが、自分が行うことを健康課題改善シートで確認できたことは、記録に残した効果であったと言える。教職員からの意見の抜粋を第1表に示す。

第1表 事例1の振り返り（聞き取り調査より）

<p><養護教諭></p> <ul style="list-style-type: none">・生徒と保健室での関わりを通して良い関係ができ、ケガの手当てについても話げできた。・事前にケース会議等の情報共有の場があったからか、日常的にもお互いの情報を伝え合いやすくなったと感じる。 <p><担任></p> <ul style="list-style-type: none">・保健室でストレッチができるようになり良かった。・専門職と保護者のつながりができて良かった。 <p><専門職></p> <ul style="list-style-type: none">・保護者、専門職、保健室の連携ができた。・他生徒に分らない保健室でのストレッチが本人にとって受け入れられる要因であり、気分転換にもつながっている。
--

イ 事例2 心理職との連携

(ア) 事例の概要

この事例で取り上げた生徒は、クラスメイトとのコミュニケーションの苦手さや経験不足などから平成26年度は欠席が多かった。今年度は新しい担任や養護教諭に支えられ、欠席が減っている。しかし休み時間は教室に居られず、保健室で過ごすことが多い。養護教諭はこの生徒にどう対応していくか悩んでいた。

(イ) 実践の経緯

この事例は分教室での実践であり、心理職は必要に応じて来校し、担任が相談の必要を感じる生徒と面談を行ったり、担任の相談を受けたりしている。養護教諭の在勤時間や心理職の巡回回数から、教職員間で情報共有をする機会が少ないことが、実践前の調査で分かった。教職員が情報を伝え合うように努めている様子も語られたが、取組につながるまでには難しい実態も挙げられた。そこで、今回は心理職を対象生徒の面談を依頼し、その内容を養護教諭、CO、心理職で共有する場を設けた。また、養護教諭は、生徒が保健室に来室している時の様子をエピソード記録としてまとめ、担任に回覧することで、情報共有を図った。

約2か月後に、再度心理職が生徒と面談し、その内容を共有した。生徒のコミュニケーションの苦手さの改善にはまだまだ時間がかかるように思われ、保健室の利用は続いていた。しかし、心理職は養護教諭と担任が共有したエピソード記録を読み、保健室での言動から、生徒が本音で養護教諭に接していることを指摘し、評価した。さらに今後の対応についての助言で、本人の気持ちや、今できていることを受容する必要性を養護教諭に伝えた。

(ウ) 実践の成果

養護教諭は、生徒との関係性や保健室での対応について、本当にこれで良いのかという疑問を持っていたが、心理職と話すことが、自分の対応の振り返りや、評価の機会になったとしている。また、回覧したエピソード記録に担任がコメントを記入し、それを確認することで、さらに生徒への対応を共有でき、担任との関係性が深まったとも感じていた。担任は、エピソード記録の回覧が、情報共有の手段として有効であることを感じ、今後も養護教諭による生徒の関わりの効果に期待するとともに、保健室での情報を基に連携する必要性を指摘した。

限られた時間の中で、情報共有の手段として、エピソード記録の回覧は有効であった。養護教諭が記録する負担感を軽減する必要があるが、生徒の言動の変化を見ることができ、評価のしやすさや見立て、具体的な対応に生かすことが考えられる。分教室における専門職と養護教諭の連携について確認できた事例であった。教職員からの意見の抜粋を第2表に示す。

第2表 事例2の振り返り（聞き取り調査より）

<p><養護教諭></p> <ul style="list-style-type: none"> ・エピソード記録で担任との共有感を感じた。 ・来室者以外で気になる生徒についても心理職に相談できたら良い。 <p><担任></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の入れ替わりがあるので、エピソード記録は良い引継ぎ資料になる。 ・行事前後の気持ちもエピソード記録から読み取れるかもしれない。 ・これからも継続して生徒の様子を知ってほしい。 ・体のこと、性のことなど、養護教諭の視点で生徒に伝えてもらいたい。 ・気になる生徒は養護教諭からも挙げてもらい、何らかの形で共有できたら良い。 ・本人が保健室でしか話さないこともあるので、情報を共有できて良かった。 <p><専門職></p> <ul style="list-style-type: none"> ・次年度に継続した支援をするためにも記録は良い。
--

ウ 事例3 歯科保健指導の活用

(ア) 事例の概要

本県の事業として、特別支援学校では、歯科衛生士が年に数回来校し、歯科保健指導を実施している。この事例に取り上げた生徒は、1学期の歯科保健指導において唇の過敏と磨き残しを指摘されていた。前回行った際も磨き残しが指摘され、歯科検診でも毎年、要観察歯が多い。現在は、う歯や歯肉炎は見られないが、状況の改善が見られないため、卒業後のことも見据え、養護教諭から取組を提案した。

(イ) 実践の経緯

1回目のケース会議には、担任2名と養護教諭2名が参加し、生徒の実態を共有した。担任も指導の必要性を感じてはいたが、この生徒は人目を気にするタイプであり、個別指導は難しいだろうとのことであった。そこでクラス全体の状況を確認したところ、指導が必要と思われる生徒が多数いたため、集団での取組の中で、対象生徒へのアプローチを試みることにした。具体的な内容は、過敏緩和を目的とした口腔マッサージと歯磨き指導であるが、まずは養護教諭による保健指導を導入として実施した。視覚的教材として、マッサージのやり方が描かれている絵カードを教室内に掲示して意識できるようにした。歯磨き指導ではチェック用紙と歯磨きの流れが描かれている絵カードを使用しながらクラスで取り組んだ。そして、2学期の歯科保健指導にて、再度歯科衛生士が、口腔内の様子を確認した。

2回目のケース会議は、担任3名、養護教諭が参加し、取組について共有した。唇の過敏はまだ大きな改善には至っていないが、歯科衛生士は過敏だけでなく口腔内ケアのために、歯科通院を勧めた。取組が結果

に結び付く難しさを実感したものの、口腔マッサージは続けるうちにできるようになってきたことや、歯磨きの目標に沿って頑張っていたことが、担任や関わった養護教諭から伝えられた。そして、家庭で絵カードを活用する提案が担任からあった。

(ウ) 実践の成果

僅かではあるが生徒の変容が見られ、取り組んだことが確実に成果に結び付くことを実感した。また、口腔マッサージは、担任も一緒に行ったことで、問題意識や取組の効果を担任と共有することができた。養護教諭は、取組を通して他生徒との関係性にも良い影響があったと振り返り、個のニーズを支援することが集団の健康課題の改善にもつながったと言える。そして、担任は2回目のケース会議において、積極的な取組への提案や、将来の生徒象についての思いを語っている。また、他生徒にとっても視覚的教材が有効であることに改めて気付くなど、個へのアプローチがもたらした波及効果もあった。養護教諭と担任それぞれが、取組から分かったことや感じたことを話し、お互いの思いや視点を共有することができた。教職員からの意見の抜粋を第3表に示す。

第3表 事例3の振り返り（聞き取り調査より）

<p><養護教諭></p> <ul style="list-style-type: none"> ・取組が、他生徒との話題にもつながった。 ・自分の立てた目標に沿って、頑張っていた。 <p><担任></p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵カードで、視覚的効果が見られた生徒もいた。 ・今後本人の自発性を促していきたい。

研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では、養護教諭が日頃の気付きからケース会議開催を発信し、その会議の中で担任や専門職と、具体的な支援策の作成、評価と改善を行ってきた。実践後の調査から、仮説の検証を行った。

(1) 仮説1について

これまで、個々の教職員が支援の必要性を感じながらも、具体的な支援につながらない実態があった。他職種と連携した経験が少ない場合、教職員同士が連携するにはきっかけが必要なこともあるが、事例1において、養護教諭の発信が、生徒への具体的な支援につながる一助となった。また、保健室が個別の保健指導をする場として機能したことも担任や生徒へ良い効果を与えていた。体や心のことを取り上げて発信できる養護教諭は、教職員同士をつなぐことができる立場であると言える。専門職は、健康診断などに関わる養護教諭の気付きには大きな意味があると指摘し、養護教諭が健康面について発信し続けることで支援が浸透し、

担任の主体的な行動につながることを期待する声があった。事例2と事例3においても、日頃から養護教諭と担任が、生徒の様子を共有することで、次の提案を具体的にイメージしたり、提案したりすることにつながった。そこから取組を形骸化させない意識を持つこともできていた。以上のことから、仮説1が検証でき、特に心身面のサポートができる養護教諭がチーム支援の中で果たす役割は重要であると改めて言うことができる。

(2) 仮説2について

情報を共有し、継続性のある支援を進めるために開いたケース会議を、20～30分という短時間で実施できたことはより大きな成果の一つである。それには、事前に養護教諭間で共有・検討する内容を絞ってケース会議に臨んだことや、健康課題改善シートの項目に沿って会議を進めたことが大きいと考える。担任からも負担なく行うことができると指摘があった。ケース会議が教職員間の話しやすい雰囲気作りに役立ったことも実践後の調査から分かった。その結果、生徒の変容を途切れることなく継続して共有することができ、次のケース会議を効率的に実施することにつながったと思われる。

健康課題改善シートの有効性については、次のようにまとめることができる。一つめ、生徒の変容を見直すことができるツールになること。二つに、今関わっている教職員間の情報共有ツールになること。そして、次年度に関わる教職員の引継ぎツールになることである。実践後の調査では、文字で残ることのメリットを挙げる教職員が複数おり、関わる人が替わっても、それまでの効果を継続できるツールになるという認識が大きかった。このことから、仮説2を検証することができ、場の設定や記録を意識することで、継続した支援をつないでいくことができると考える。

2 今後の課題と展望

実践後の調査の中で、今後期待することとして次の2点が挙げられた。

- ◆ケース会議で実態や取組を明確にしたことを、授業や指導に生かすことができる
- ◆取組の記録を、個別教育計画の作成や評価に反映させることができる

このことから、養護教諭も、個別教育計画の作成や評価に関わる中で、授業や指導に関心を持つことが必要であると考えられる。学校保健の視点で、授業の内容や個別指導での児童・生徒の様子を知ること、新たに気付くこともある。そして、その気付きを発信したり、評価や改善に生かしていくことが大事である。そのためにも、健康課題気付きシートや、健康改善課題シートの活用を続け、書式を工夫したり、活用や保管の方法を考えたりすることで、引継ぎ資料としての有効性

をより高めることも必要である。

養護教諭は、今後もチームの中で、健康面について情報共有の中心となる意識を持ち、健康課題の改善について発信することが必要である。そして、発信した後も、積極的に養護教諭が教職員に働きかけることで、様々な考え方をつなぎ合い、より支援に結び付けることができると考える。今回の研究で得た成果をこれからの実践に生かしていきたい。また、少しでも他校での実践に参考となる研究であったならば幸いである。実践の積み重ねは、支援の幅を広げ、質を高めることになる。それによって、養護教諭間の連携、校内の教職員間の連携がさらに強くなっていくことを期待する。

おわりに

本研究では、養護教諭が健康課題への気付きを発信し、チームでの実践を通して、継続したチーム支援のあり方について考察してきた。

児童・生徒が、継続した取組によって自分の変化を実感し、改善への意識につながるのと同様に、教職員にとっても実感を伴った結果が次の取組へのモチベーションにつながる。担任が、児童・生徒に直接働きかける立場ならば、養護教諭は、担任や児童・生徒、家庭も含めて働きかけ、成功体験の積み重ねを支援する役割を持っている。小学校・中学校・高等学校でも支援教育の視点で多様な職種の関わりが重要視されている今、今回の実践のような養護教諭からのアプローチの仕方が、今後も望まれると考える。

最後に、グループインタビューにご協力いただいた県立学校保健会特別支援部会の養護教諭の皆様、ご多用の中、聞き取り調査や実践研究にご協力いただいた教職員の皆様、そして県立保健福祉大学畑中高子准教授に深く感謝を申し上げる。

参考文献

- 神奈川県教育委員会 平成22年「協働支援チーム宣言」
中央教育審議会 平成20年「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について（答申）」
城所康子 2014 「中学校の養護教諭が行う健康相談活動を校内のチーム支援に生かすための研究―保健室来室者へのヘルスアセスメントの実践より―」
神奈川県総合教育センター長期研究員報告 第12集
福本美佳 2008 「健康相談活動を生かした児童生徒の支援の在り方―養護教諭発信のケース会議の提案―」
愛媛県総合教育センター長期研修講座研究集録